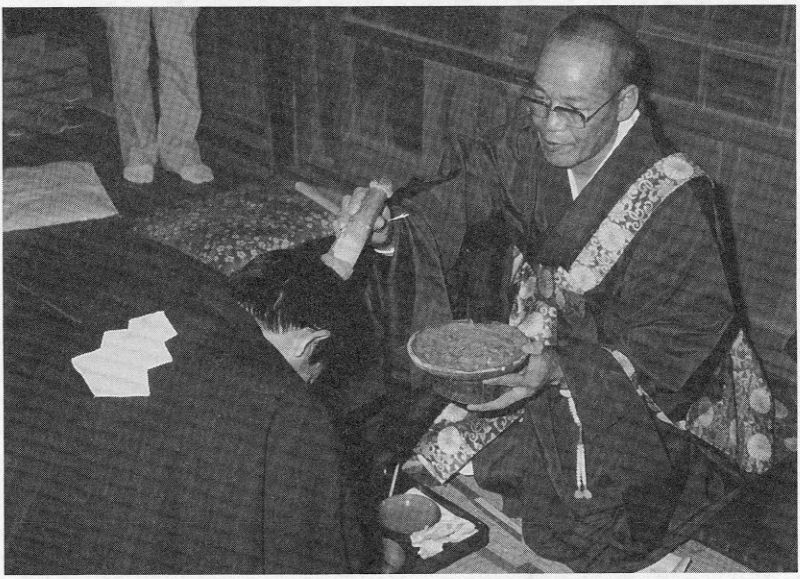
近江のオコナイにみる牛玉宝印

中島誠一

最近、オコナイ行事について書く機会が数回与えられた。『神々の酒肴―湖国の神饌』[1]を始め、本学文学部史学科創設三十周年記念『史学論集』[2]そして日本民俗大辞典（吉川弘文館）などである。これに私の勤務する市立長浜城歴史博物館の研究紀要[3]、特別展の図録等[4]を併せれば相当数には上るだろう。もちろん数を誇るわけではないが、その内容は、フイールドの報告とわずかな結論で貫かれている。換言すれば、オコナイの行事内容の子細な報告とこれに絡む若干の感想ならびに展望である。

この構成には理由がある。ひとつには激変する時代の民俗事象をできるだけ多く、時間の推移とともに細かく記録したい（そのため執拗なぐらいの時刻表記がある。所謂、分刻みの記録）そしてビジュアルな表現をしたいという欲望の結果である。このテクニックの向上は、おかげで積年の訓練からある程度の成果を得ることができたと自負している。特に後者に必要な写真撮影は、先輩から「最近は本業よりも写真の分野でご活躍の様ですね」と絶賛をいただくまでに上達した。さて冗長にすぎる前言は活字の無駄使いである、かくいう私も水野先生の講義を受ける際には寡黙であったのだ。

さてオコナイとは村内の豊作・大漁・安全などを祈願して一月～三月に行われる行事である。籤や順番で決められたトウヤ、トウニンなどとよばれる村の代表者を中心に、巨大な鏡餅や掛餅・造花による荘厳・乱声・牛玉宝印



頭にベットウを捺す（甲賀郡甲南町市原）

の授与などが特徴的に見られる。その起こりを五穀豊饒、国家鎮護をスローガンとして行われた奈良時代の修正会の記録に求めることもできるが、民間の行事として確認できるのは、参加者の精進潔斎と造花による荘厳などの山里のオコナイ景観を記録した『三宝絵詞』九八四年（永観二）である。オコナイは現在、西日本の各地に認められるが、「シンシホツガン」（滋賀県甲賀郡石部町西寺）「イモクイ」（同県甲賀郡甲南町竜法師）「鬼まつり」（佐賀県藤津郡太良町大浦）など、行事の一部を名称とする地域も多い。

滋賀県の甲賀郡には、天台系のお堂を中心としたオコナイが見られるが、同郡甲南町深川には、一五七九年（天正七）の頭役帳と一七四四年（寛保四）の行絵図が伝存する。隣村の市原では、毎年一月十三日、行絵図と同様に樒で飾った掛餅、稲束に小芋やサイコロ等の作り物を差したセコ、竹に焼餅をくっつけた穂の餅などで天台宗浄照寺の薬師如来を荘厳する。法印が読経を行い村人が持ち寄った藤の木で激しく床をたたき、ベットウとよばれる男根状の印で頼守（一年間の

お鏡の上に置かれたゴー（伊香郡高月町高野）

堂守り）が参加者のつむじに朱を捺していく。この一連の行事内容は、島根半島の沿岸部で曹洞・浄土宗の堂を中心に行われている「オトウサン」（平田市塩津）、「大餅さん」（同市美保）、「伽藍さん」（八束郡美保関町諸喰、二〇年ほど前に廃絶）行事や真言宗の堂を中心に行われている「大餅さん」（松江市秋鹿）（八束郡八雲村星上寺）行事などと基本的には同形である。

滋賀県の湖北地域は、ほとんどの村々でオコナイが認められるほど高い残存率を示しており、伊香郡木之本町古橋には、一七一三年（正徳三）から一九六三年（昭和三十八）までの頭役帳が伝わり、真言系山岳寺院がトウヤを選ぶ指頭オコナイが盛んであったことが確認できる。ところが現在、湖北地域では、オコナイは神事と強く意識され行事は神社を中心に行われることが多い。精進潔斎、餅搗き儀礼、トウ渡しなどを厳修する傾向が顕著で、オカワ（お鏡の型枠）を新藁で美しく飾りトウヤの象徴とする。お鏡は、文字どうり鏡のように表面を仕上げ、純白、巨大なものが最良とされる。掛餅型の荘厳は、伊香郡内の天台・真言系の

薬師堂で簡略型と思われる立餅や牛玉宝印のセット（伊香郡高月町高野、同郡余呉町八戸）が認められるにすぎない。このようにオコナイは、神事と規定し主体をお鏡とする地域と、その中心を寺院の荘厳と乱声などの魔除行為とする地域に大別できる。その要因として湖北地域の鎌倉期における浄土真宗への村単位での改宗、および明治初期の神仏分離がオコナイの祭祀施設等の変更に多大な影響を与えたことは否定できない。

このオコナイに関する概念規定は冒頭のべた数点の論文の中でふれたものである。この考えは現在でも変化してはいない。ただし民俗調査を継続していくと当然、概念規定に合致しない部分、もしくは細部の修正を余儀なくされることがある。本論のテーマである牛玉宝印もその例にもれない。

さて牛玉宝印とは、牛の腸・肝・胆に生じる一種の結石を、すりつぶして朱と合わせ印を捺したもので厄除けの護符として社寺から発行された。幾内の大社寺では現在も修正会、修二会などで参詣者が牛玉宝印をいただいたり額に朱をもらって帰途につく。近江では比叡山で初詣の人々に牛玉宝印の授与をおこなうが、中には直接捺されるのを嫌がる女性もいてハンカチを額にあてて授与される光景が見られる。大和では、東大寺修二会式に牛玉宝印授与が練行衆に行われる。長谷寺ではユーモアたっぷりの三匹の鬼が登場ののち、僧侶同士の授与がおこなわれ、参詣者のために同様に授与がなされる。類例を上げれば暇ないが朱をいただけば一年間無病息災という功徳をいただく年頭の光景である。

ただし本論で言及するのはこれら大寺院における牛玉宝印および授与の様子ではない。冒頭のべた民俗行事、近江のオコナイにおける牛玉宝印の諸相である。まずはその実例を紹介しよう。

―甲賀郡の事例―

例㈠　甲賀町小佐治

小佐治は、杣川の支流、佐治川上流に位置する。例年一月十三日にされるオコナイは、子どもの減少によって、昭和五十八年以降、省略した形で行われている。筆者が平成二年に調査にお邪魔した際も同様であった。

当地のオコナイは、信徒の家から誕生の順で長男二人が選ばれ、懸頭（カケトウ）となり、鏡餅などの供物を準備する。これに対して翌年オコナイを請けるものを請頭という。

供物の餅つきの際には、松丸太五本で棒づきをし、切りワラを臼のうえから一面にふりかけたりする。また別当は、長さ一メートル余りの猫柳の枝六〇本程を前もって準備する。これに牛五と書き、牛の宝印を押した四つ切りの半紙を枝の根元を二つ割りにしてはさむ。そして枝の中ほどで折り返し、ワラで結ぶ。これはオコナイの際、祭壇に供え五穀豊饒を祈願した後、各戸に配る。各戸では「ミト祭り」といって、苗代の水口に挿して豊作を祈願する。

十三日、午後、父親が榊、そして硬貨百十三枚をお神酒錫に吊るして持つ。別当を先頭に懸頭兄弟・請頭兄弟の四人が行列を作り、安楽寺まで練り歩く。信徒たちがお堂に集まると、住職の読経、願文を読み上げる。最後にランジョウ（乱声か）と大声をあげると呼応するように本堂脇の控えの間の者が、板戸をドンドンと激しく叩く。そして住職から懸頭兄弟・請頭兄弟の四人が額に版をもらう。

こののち別頭の受け渡しがあるが、この際にむしろをかぶせる所作をする。

例(二)　甲南町稗谷

稗谷は、山間の盆地状の農業地域である。屋敷は丘陵地の間に点在し、よく手入れの行き届いた畑からは、特産の日野菜を産する。

オコナイは、一月十五日、未明より天台宗安楽寺の本堂にて執り行われる。まず餅や里芋を割竹に差し飾った籠が裃の四人の当人によって堂内に運び込まれる。この際ヒョオー、ヒョオーというかけ声でくるがこれは平世－平

世という意味である。

堂内の飾りつけが終わったころ鐘がつかれて、上組、下組の人たちが、風呂敷に包んだ裃を持参し、庫裏の廊下にて着替えをする。本堂に参集すると、上座に住職および宮守り二人が座し、その左右に歳の順で両組混じって座る。まず上座より当人が湯桶にて酒を順次すすめて、次に洗米とご飯をすすめる。そのあと住職の読経があり最後にダンジョウと大声を出す。これはあとのノットを清めるためという。ノットとは左手にしきみ、右手に握りのついた円形のものを持ち、中空に「の」を書くようなしぐさを指す。これを受ける際には、樒の葉を一枚つまんで半分に割り、後ろに放り投げる。そのあとで　頭をたれて印をもらう。ノットは、自分より上座の者の時にはその前までいってするが下座のものは自ら進んで受ける。ノットをするのは、本堂の上柱の前に座った人と決まっている。

ノットが終わると正月に宮守りが準備した日枝・稲荷両社の神札と樒、萩を束にしたものをいただく。苗代を作っていた時にはこれをミトグチに立てていた。

これら一連の行事が終わると、裃をとり、注連縄編みに移る。上下の組がそれぞれ安楽寺本堂、稲荷神社社務所に分かれて作業をおこない、編み上がるとまず本堂内に注連縄を張り住職が読経をする。読経の最中、庫裏の前では、宮守二人がセンダラク、マンダラクと唱えながら注連縄の清めの弓を射る。読経が終わると注連縄を堂内より出し、日枝神社の鳥居の前の古木に吊る。住職は稲荷神社の社務所に移って、同様に注連縄の前で読経をし、このときには宮守二人は稲荷の森に向かって弓を射る。読経が終われば稲荷社の鳥居の前の古木にしめ縄を吊るす。二本のしめ縄が吊り終る頃にはすでにあたりは暗くなっている。

例(三)　甲南町竜法師

竜法師は、甲賀五十三家のひとつとされる望月本家の忍術屋敷でよく知られている。当地は、稲作を中心とした

頭にゴハンを捺す（甲賀郡甲南町竜法師）

農村であるが、古来より開けたところであり、良弁開基と伝える天台宗嶺南寺がある。オコナイ行事は、この嶺南寺で一月一〇日に行われるが、当地では、行事のことをオコナイともよぶが、普通イモクイとよんでいる。午前一〇時には、嶺南寺の地蔵堂に面座（オモザ）・中座（ナカザ）・正面座（ショウメンザ）よりそれぞれ二人ずつ六人が、餅・御神酒などの供物を運ぶ。なお、餅は、これを若餅もしくは、オト餅とよび、跡継ぎができると餅を供えるきまりである。

また中座の竹若姓の最長老は、別当とよばれ折烏帽子・直垂に白木の錫を持って参加する。しかし近年は必ず竹若姓の者から出すというきまりがくずれつつあり、とにかく中座より出すというように変わりつつある。

参加者が揃うと、住職による三座のトウヤの紹介、般若心経の読誦、延命祈禱が行われる。これが終わると場所を本堂広間の阿弥陀尊の前に移し、席に着く。正面座は本尊を背にし中座と向かい合う格好で面座は膳に盃と皿、箸をのせ、中座は盃と箸、正面座には盃

のみがすえられている。

献酒が終わると住職のダイジョウという声で、面座のものが、大豆と大根のサイノメ切りをつかんで空にまく。これは厄払いだという。

このあと別当が立ち、住職の前にある木製の判をもって、まず住職に、そして面座の長老から順番に額に捺していく。この「ゴハン（御版）をもらう」と長生きできると信じられている。

お鏡は、一つは住職が、残りは来年トウヤをする請頭が持って帰り、座の成員に切って分ける。寺での儀式が終わると、それぞれの座でイモクイの当番の家に集まり、長老一〇人をよびナオライである。座によっては嫁入りと同様の豪華な共同飲食をする。

例㈣　甲西町三雲字妙感寺

妙感寺には藤原藤房の開基と伝える妙心寺派の妙感寺があるほか、天台宗園養寺、日蓮宗妙光寺そして明喜神社などの社寺がある。当地のオコナイは、この明喜神社でなされ、寺オコナイの多い甲賀郡のなかでは貴重な例といえる。オコナイは現在二月十三日で以前は一月十三日であった。明喜神社には、左・右・中座の三座があり、左座の二十四戸が最大である。各座には、左右の座に三名ずつ、中座に一名のオトナがいるが、これは成員の出生順で務める。トウヤは、現在、順番制であるが、以前は長男の生まれた座員がつとめた。

オコナイの準備は、十一月二十八日の口開け、すなわちトウヤが自分の座のオトナを接待することから始まる。そしてオコナイの前日に松切り（以前は一月八日）をし、餅つき（以前は一月十一日）をする。松は長さ六メートルにおよび、この先に十字に押さえた鏡もちを縛りつける。

餅つきは、棒杵を使って千本づきを行うが、最初にお鏡をとり、次に笹餅といって青竹一本に小餅を十二個巻きつける。午後からは、生御膳といって各座で明喜神社の本殿に供える神饌を作る。生御膳は三座三様であり、中座

のみは一升の赤飯を作り、これを餅とよんでいる。左右両座は、御膳の古図を伝えており、これを参照しつつ、生御膳を作る。

翌十三日は、オコナイの本日である。左座は、午前七時半ごろトウヤの家に集まって食事をすませ、松を縁側に引き込み、お鏡を十文字に枠を使って押さえ込み、松の先端に縛りつける。八時、四人でかいた松を先頭に、生御膳、太鼓と続き、エトー、エトーのかけ声とともにトウヤを出発する。

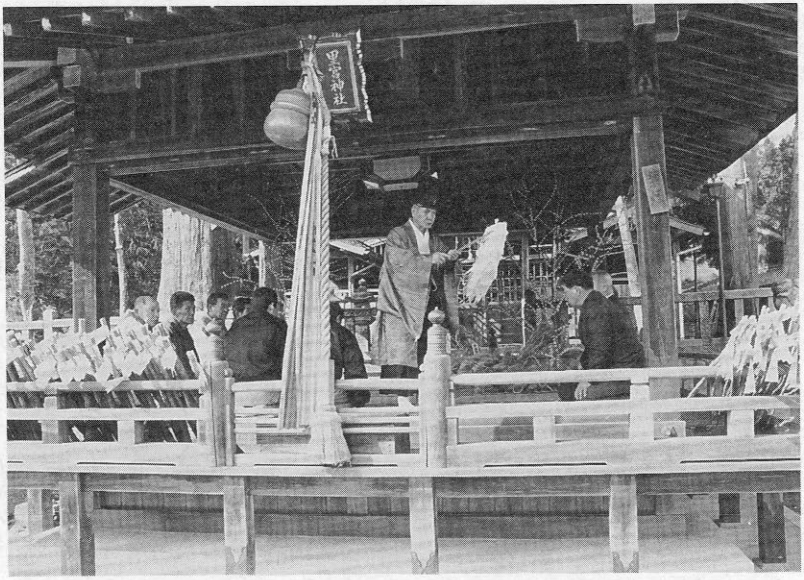
右座は、八時二〇分頃、準備を開始、外で昆布茶を飲み、太鼓などを準備、八時三〇分、神社に入る。そのころ中座も神社の本殿に赤飯の大盛りを供え終る。すべて供え終ると、社務所ではナオライの準備が始まる。本殿では、オトナの一人が正面に座り、般若心経を唱え、外の六人はそれに従う。そのあと社務所でトウワタシをおこなうが、この時、大人より新トウヤに牛王の木を渡す。

例(五)　水口町杣中

オコナイは、天台宗東光寺で一月十二日にされる。前日は、年行事の家（当家）で、供物の準備をする。千本づきで餅をつき、男餅・女餅を作る。餅つきが終わると、庭で一組のドウとよばれるワラの供物を作る。これは隣村の市原のセコより一回り小振りであるが、ワラを束ねオビでまとめて、これにコイモで作った雀を竹串に刺し立てる。以前は子どもの顔を作って刺していたが近年はこの形である。ほかに花餅、ヘソ餅を作る。

翌日、昼過ぎには寺に集合し、本尊の祭壇の飾りつけをおこなう。結界の内側に一組のドウを置き、その上部に、十文字に割竹で押さえ、樫の木の股木に縛りつけた男餅と女餅を吊るす。最後に女竹を長く四つ割りにしたものと、花餅、輪切りにしたミカン、昆布などを刺し、鴨居に掛ける。

オコナイは、シュウシ、ユズリワタシ、読経と進行し、読経の終わりのころ、オッサン（水口町三大寺の飯道寺の住職）がダイジョウと声をかけると、皆が手持ちのアカダシの木（アカシバ）で床をたたく。その後、男餅と女



拝殿に牛王さんをかざる（甲賀郡信楽町多羅尾）

餅をくっつけ最後に年行事の胴上げ、鏡開きでオコナイは終わる。帰途、オッサンの手書きの牛玉宝印をいただき、後日これを水口に立てる。

例(六)　信楽町多羅尾

二月一〇日、成花オコナイともいう。月行事（当人）はハゼの木を山から切り出し、紙の当人は宝珠を捺した美濃紙をハゼの木に付ける。成花の当人は、成花（黒モジの木に餅を付けたもの）をつくり、神社で祓いをうける。そののち本殿の前に勧請縄を吊るす。社務所での接待が終わると、氏子は牛王さんを一本ずつ持ち帰り、水戸口に祀り五穀豊穣を祈願する。(5)

―湖北地域の事例―

例(七)　坂田郡山東町河内

河内のオコナイは、誉田別尊を祀る八幡神社を中心に行われ、作り物などにその特徴を見ることができる。さてオコナイは、旧暦のころは正月七日が本日であった。改正ののち二月三日の餅つき、二月七日の本日とかわり、更に平成五年より二月の第一土・日曜日と変

更された。これに伴い内容もかなり異なってきている。ここでは一九八八（昭和六三）の行事のあらましを紹介するとともに、適宜、改正前のようすについて述べる。

二月六日、餅つき。棒ぎねでつき上げるとまずウスヌグイといって当日、自分たちの食べる分、次に八幡神社に供える大鏡、次に諸神に供える餅、マユ玉といった順番でこしらえていく。棒づきの際には、祝い歌として、伊勢音頭を歌う。大鏡は、浅い桶のなかに子餅をピラミッド型に重ね、頂上にみかんを置き、榕を刺し、その周囲を紅白の布で飾りつける。改正前の大鏡は、円筒の餅の上に平べったい二枚の餅を載せるという独特のものであった。マユ玉は本日に八幡神社に供え終わると、ネギのところへ持っていく。ネギはいわば代理神主で、長男で独身の者を一名選んで、その役に当てる決まりであったが、現在ではその選出は青年会に一任されている。餅つきの進行中、野菜で鶴・亀・男女のシンボル・御神酒錫を作り、板にくっつけてトウヤの鴨居にひっかける。野菜は大根・人参・カブラ・ゴボウ・ネギの根っこ・トウガラシなどで、河内で取れる野菜を使うのが決まりである。

二月七日、本日、朝、トウヤに集まり、餅の荷造りなど御供え物の準備。トウヤを出発するのは午前十時ごろ、伊勢音頭を歌いつつ、トウヤの持つ御幣を先頭に進む。改正前には大神事、小神事二組の行列が、それぞれに大鏡を持って社参したが、これを荷うのは長男で未婚の男子と決まっていた。また行列にはモミドウシを被って、たれ衣をかけた少女のつくことがあった。八幡神社に着くと、運んできた大鏡・その他の供物を拝殿に並べる。そのあとネギによる祝詞、祓いが済むと改正前までは拝殿においてナオライがされていたが、現在では社務所に参加者は全員移動し、餅の分配、御神酒、そしてトウヤの玉くじがおこなわれる。玉くじは次年度の担当組員が引く。その際すでにオコナイに当たった組員は省く。次年度のトウヤが決まると、すぐ筆に墨をタップリつけ、顔中にいたずら書きをする。これでトウワタシは終了である。なお改正前までは、村の成員を大神事、小神事のどちらかに分け、組への加入の順番でトウヤを勤めた。その際ゴーとよばれる二〇センチぐらいの棒の先に墨を塗り、次のトウシュ

の額に捺していた。ゴーとは牛玉宝印のことであるが、オコナイのトウヤがこれをつくり、本日に拝殿に供えたのち、人々にわたしていた。ゴーは大切に持ち帰り、四月から五月の初めにかけて、水苗代をする際、水口に立てて、病虫害防除の護符とした。ゴーの木は河内の川岸に自生する柳の木であった。

例(八)　木之本町古橋

古橋では神事と書いてオコナイと読ませ、通常は薬師オコナイと言い習わしている。特徴的なのは、供物としてのお鏡の制作法ならびに供え方である。お鏡は曲げ輪と呼ばれる竹のタガに木片をあてがって枠を作り、その中に少しずつ、餅を入れて仕上げていく。お鏡は全部で六個、仕上げると棒の礼といい、臼に残した最後の餅を棒杵にからめてトウヤの中柱にくくりつける。本日にはお鏡を薬師如来に供え、僧侶がこれに墨書する。

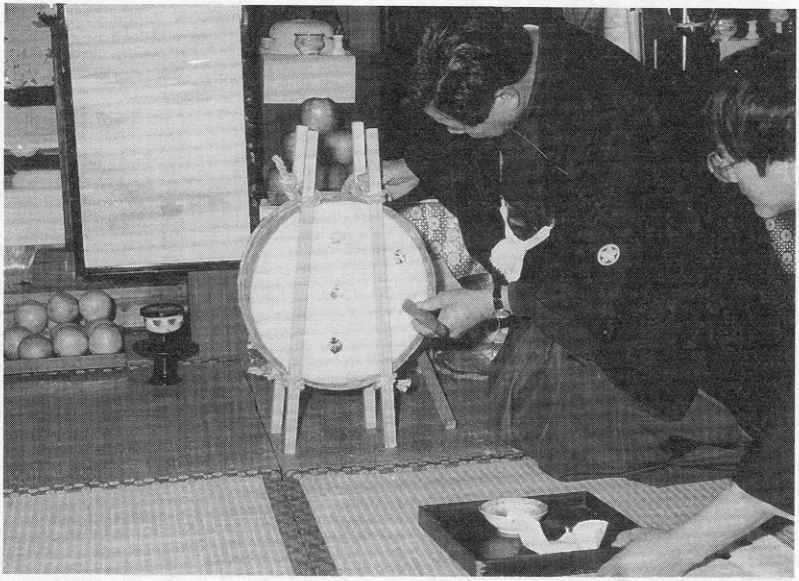
例(九)　西浅井町集福寺

餅つきは二月一〇日であるが、神社に供えるお鏡であるオオトウ、欅に付ける花餅、もち米に粟を混ぜた粟餅などを作る。また本日の社参の際、行列に色を添えるものとしてヌカゴサシがある。これはわら束に細い竹を刺し、これに大根・人参・ヌカゴなどを串刺しにしたもの。後頭はヨンボメシというものを作るが、これは米を台形に盛り、その上にワラビやヨンボといった山菜や豆腐を載せたものである。またゴーの木といって牛王箸をつくり祭典が終わると、村の人たちに配る。これは後日、鍬初めの式を苗代でおこなう際、田に挿した。(6)

例(十)　余呉町八戸

八戸は余呉湖の北岸にある農業地域である。神社は八幡神社で、近接して薬師堂がある。村の宗派としては、東本願寺派が十五軒、西本願寺派が二軒、曹洞宗が九軒、神道二軒とバラエティに富んでいる。曹洞宗九軒の内、五軒は昭和三十一年六月に、坂口にある真言宗菅山寺から転宗した。

さて薬師堂では毎年二月八日に御塔（オトウ）がある。当地ではこの行事のことを対外的には薬師さんのオコナ



宝玉で朱を捺す（伊香郡余呉町八戸）

イと言っている。

二月四日、米カシ、昔は井戸で洗ったが、現在は水道を使う。女の人がふれてはいけない。米カシの済んだ米は、上塔の宿に移され、七日の餅つきまで置いておく。

二月七日、午前一時ごろ、風呂に入り身を清めて、横杵で餅つきを始める。火入れの際には、一年間、塔人の象徴として床柱にしばりつけておいた御幣、オカワのひもをたきつけにする。現在もち米を蒸すにはガスを使っているが、この点火の際にも必ず御幣を種火としている。この御幣は上塔の者が餅を拵える時に作製するのが習わしである。餅はまずオカワサンの六升ドリのお鏡をつくる。これは厚さ、高さともに一〇センチメートルくらいの底なしの桶に、餅を詰めて成型する。

午前四時ごろには餅つきは終了し、その夜は灯明をつけて寝ずの番である。以前は余興があったが今はなく、上塔の宿に集まって組のもの全員で食事をする。これらの経費は、五年間の積立と一反三畝の御塔田の

収入を充てる。料理は、芋・大根・煮つけなど精進料理である。

二月八日、午前九時、上塔組が御幣を先頭にオカワの餅と続いて、薬師堂に入る。上塔組、受塔組、村の人たちで狭いお堂の中は一杯になる。まず川並の正源寺（曹洞宗）の住職の大般若経転読がおこなわれお説教がある。終わると果物、菓子などの供え物を村の人たちにさげて、両組だけが残り対座する。

まず上塔組より挨拶があり、長さ十五センチメートルぐらいの宝玉（タカラダマ）とよばれる円柱状のものでお鏡の表に七つ、裏に三つ、御幣に五つ朱を捺す。朱は食紅を使う時もあるが決まってはいない。このあと、オブクさんの箱とお堂の鍵、お鏡を受塔に渡し、トウワタシは終了、あとは直会である。なお八戸の御塔の形式が組御塔になったのは区の規約の一部、薬師如来に関する規約によれば明治四十三年のことである。この文書からは五組のオコナイが、前は三組であったこと、その前は個人で御幣を請けていたこと、立餅が旧習であることもわかる。

例(十)　山東町志賀谷

二月二日、牛玉の木挟み。禰宜が牛玉の木といって中国伝来と伝える特殊の木で「神ノ木」一名、牛玉二本を作る。長さ一尺二寸（閏年一尺三寸）の先、三寸五分を三つ割にし午壬法寅（のち志賀神社と書く）と記した神札を挟み先を左へ巻いておく。中央に白紙を巻きコヨリを掛け、上にヨリカケ四本を付ける。これを三方に載せ、紙の羽をそえて、神社の内陣に奉納する。(7)

オコナイは「華の頭」とも呼ばれ、一月十五日の玉串から始まり、この日、公民館でみくじを引き禰宜、頭屋を決める。

二月八日、朝から餅つき、しめ縄、エビなどの準備をする。一〇日、午前六時、火打ち石を使って点火、もち米を蒸し始める。朝食ののち餅つき開始。最後に禰宜、頭人、剣持、組代表の四人で伊勢音頭に合わせて五分程度、本社のお鏡をつく。これをお鏡つき式という。午後三時からオンベ作りにかかる。神体を模した独特の御幣をオン

べといい、禰宜が作り方を指導する。その夜、一〇時から「神の膳」の準備を始める。十一日、午前零時過ぎ、神社に神の膳を供える。まず本社に五組の膳と御神酒を供え、続いて両末社、神明社、多度社の順に供え礼拝し、一同退社する。そののち全社分の神の膳のお下がりを社務所へ引き上げ、本社分は頭屋へ配る。このあと、御華（餅花）が組内を練り、頭屋での御盃の儀、社参、祭典、禰宜の交代式、新頭屋での盃の儀、鏡開の儀と続く。

例㊿　余呉町国安

誕生日の順番で、先頭・後頭の一組の当人がオコナイを務める。元日、餅つき、ゴウノバイ（牛玉宝印）の制作などをを行う。二日、鏡餅を背負うための背負い縄など社参の準備を午前中にすませ、正午過ぎ、宮上げの行列が出発。草岡神社で神事のあと次の当人が決まる。三日、正午からトウワタシののち鏡開きを行い、新旧の当人のあいだで道具送りをする。

これにともない国安では田打ちをする。田打ちは仕事始めというべきもので、一月十一日、早朝より升・ゴウノバイ・杉葉・ユズリハ二本、ミツグワを持って自分の苗代田に行く。田の水口あたりで三〜四回、クワを入れて土を盛り上げ、東の方にゴウノバイ・杉葉・ユズリハを一対立てその中央に一握りの米を撒く。そのあとで二拍し礼拝する。なおゴウノバイとは棒の先を割って宝珠を捺した美濃紙をはさんだもの。

例㊾　余呉町摺墨

一月六日、頭屋の家で米を蒸し、千本づきにて餅つきが行われる。この時、小豆の餅をはなびらといって、栗の枝に餅をつけ、神棚に供える。翌日の本日には、神社にお鏡を供え、参拝者の額に土印を捺す。そののち次の頭屋がオカワを首に掛けて帰り、トウワタシの儀がおこなわれる。オカワは頭屋の象徴として、新頭屋の家に飾られる。

例㊽　余呉町下丹生

下丹生では、従来一月十三日から十五日であった大頭行事を平成元年より十五日だけに短縮した。当日、餅米を

土印を捺す（伊香郡余呉町摺墨）

朝六時ぐらいから蒸し始め、あがると棒づきを行う。神社・阿弥陀堂・搗当屋・オカワに入った大頭餅・最後にノウタリといって皆に分ける餅をつくる。膳の席のあと、大頭あげといって、輿に大鏡を載せ、村内を一巡したのち神社に供える。頭渡しがすむと、再び大頭餅を下げ、受当屋において鏡割りをする。なお改正前までは、一月七日にオコナイといって氏子全員の額に土を捺していた。

例㈤　余呉町椿坂

二月二日、米かし。四日、餅つき。五日、八幡神社にて北座・南座が寄って、福井県敦賀市の浄土宗の僧を招いて、大般若経の転読を行う。そのあと三献の盃を行うが、中途におつゆが出る。このおつゆは、「汁煮きばばあ」といわれる女性が担当する。終わると、蘇民将来と大般若経の札をもらって帰る。なお椿坂では、おこないとは呼ばずに神事（じんじ）という。

例㈥　余呉町菅並

当日は一斗のオカワを中に入れたお鏡を作り、樒の木で神籬を作って神前に供える。塔渡しの盃事には牛

蒡二本を半紙でまき、干柿を添える。直会には豆腐の丸炊を木の椀で食べ、また各自ワラツトに入れて持って帰る。[8] 現在では、頭人は順番で決められるようになった。当地では、氏神さんのオコナイ（六所神社）を部落全体でおこなうほか、観音そして地蔵の組オコナイがなされる。

―湖西地域の事例―

例㈥　高島郡朽木村上麻生

この行事は、日本海で採れたシイラという魚を、調理し若宮さんに供えるものである。元日、朝から若宮に集合し、二人の宮守の目の前で、シイラが三枚におろされる。これをお供えし、イロリで焼いたサバを肴にお神酒を酌み交わす。そのあとお供えを下げて、宮守が牛玉宝印を皆に配ったのち、ナオライに移る。このシイラという魚は、日本海ではシイラ漬けという独特の漁法で捕獲される魚である。前述の志賀谷でも神の膳にシイラを供える。

以上、甲賀地域より六例、湖北地域より一〇例、湖西地域より一例、合計十七地区の牛玉宝印および牛玉宝印の授与に何らかのかかわりのある事例を紹介した。[9]

さて牛玉宝印がオコナイ行事のなかで非常に重要なファクターであることを意識したのは一九九〇年に作成した特別展図録『近江のオコナイ』からである。この時は甲賀郡内の諸事例を見て触発されたのである。この意識を明確にしたのは千載一遇というべきか、一九九一年に町田市立博物館で開催された『牛玉宝印―祈りと誓いの呪符[10]』の特別展図録執筆を依頼された時である。ここに紹介した十一例という報告は量としては決して多いものではない。またその資料は『近江のオコナイ』から引用したものであり、ややイージイなものであることは否定できない。ただし牛玉宝印というものがオコナイ研究の中で重要な位置を占めるという認識がこの時点で明確になったこと、すなわち新しい切り口が発見できたことが、私自身には大きな意味を持ったのである。この視点から西日本に残る年

牛玉宝印および牛玉宝印授与に関する一覧表

例番	地区名	オコナイの本日	名称	形態	行為
1	甲賀郡甲賀町小佐治	1月13日	猫柳の枝	1m余の猫柳の枝に「牛五」と書いた半紙を挟む	「ミト祭り」といって苗代の水口に挿して豊作を祈る。
2	甲賀郡甲南町稗谷	1月15日	ノット	握りの付いた円形の木版	額に判を捺す所作をする
3	甲賀郡甲南町竜法師	1月10日	ゴハン（御飯）	木製の版	額に判を捺す所作をする
4	甲賀郡甲西町三雲字妙感寺	2月13日	牛玉の木	40cmぐらいの木の先端を削って、牛玉宝印の札を挟む	トウワタシの際、大人より新トウヤに渡される
5	甲賀郡水口町杣中	1月12日	牛玉	手書き牛玉宝印	水口に立てる
6	甲賀郡信楽町多羅尾	2月10日	牛王さん	宝珠を捺した美濃紙をハゼの木に付けこれに成花を挟む	水戸口に祀り五穀豊饒を祈願する
7	坂田郡山東町河内	2月7日	ゴー	柳の木に牛玉宝印の半紙を挟む	額に墨を捺す(改正前)。水口に立て虫害防除の護符する
8	伊香郡木之本町古橋	3月8日	――	――――――	お鏡に墨書する
9	伊香郡西浅井町集福寺	2月11日	ゴーの木	約35cmぐらいの栗の棒	祭典ののち持ち帰り、鍬初めの際、苗代田へ挿す
10	伊香郡余呉町八戸	2月8日	宝玉	長さ27、5cmの木の棒	お鏡に朱を捺す
11	坂田郡山東町志賀谷	2月11日	牛玉	神ノ木の先端に牛壬法寅(のち志賀神社と書く)と記した神札を挟み先を左巻きにする	神社の内陣に供える
12	伊香郡余呉町国安	1月2日	ゴウノバイ	棒の先を割って宝印を捺した美濃紙を挟む	1月11日、早朝に田に挿して田打ちをする
13	伊香郡余呉町摺墨	1月7日	土印	20cmぐらいの棒	参拝者の額に朱を捺す
14	伊香郡余呉町下丹生	1月15日	オコナイ	木の棒	棒の先端に土を付けて額に捺す
15	伊香郡余呉町椿坂	2月5日	札	蘇民将来と大般若経の神札	門口に貼る
16	伊香郡余呉町菅並	1月11日	ゴンボ	牛旁2本を半紙で巻く	トウワタシの際、供物とする
17	高島郡朽木村上麻生	1月1日	牛玉宝印	紙	祭典終了時に参加者に配布する
A	甲賀郡甲南町市原	1月13日	ベットウ	18cmぐらいの棒	額に朱を捺す。掛餅にのを書く。作柄を占う。
B	甲賀郡石部町西寺	1月15日	漆の木	1m60～70cmぐらいの漆の木の先端に牛玉宝印と黒印された紙を結びつける。	オコナイの途中この杖で床を突く
C	伊香郡余呉町上丹生	1月7日	ハン	長さ20cmぐらいの木の棒	額に朱を捺す
D	伊香郡高月町高野	3月8日	ゴー	栗の木の先を4つに割りにしてお札を挟む	お鏡の前に供える
E	伊香郡高月町馬上	2月9日	ハタ	松の木に紙を挟み(ハタ)、大根で作った宝珠印を捺す	大根で作った宝珠印をハタのほかにお鏡にも捺す
F	栗太郡栗東町御園字山入	1月最初のうしの日	牛の版	大日と刻まれた版木に祈禱を受ける	牛小屋の上部や柱に貼りつける。

参考
例1～5、7、10、15、A～Fについては『近江のオコナイ』（注4）に行事次第が掲載されている。
例8、11については『湖北のまつり』（注4）に行事次第が掲載されている。
例6、9、12、13、14、16については『神々の酒肴－湖国の神饌』（注1）に行事次第が掲載されている。
例17については『滋賀県の祭礼行事』（滋賀県教育委員会　1995年発刊）に行事次第が掲載されている。
※オコナイの本日は調査当時のもので、現在、日曜に集中して行われる傾向が顕著である。

頭のオコナイ行事を再照射すると、底流に牛玉宝印・乱声・カンジョウ吊りなどのセットが見えてくる。このセットを私のフィールドの原風景というべき滋賀県北部（湖北）に置換してみると、逆にその特殊性も浮き彫りになってきた。ただし方法論的には甘さがみえ、結論も何となく玉虫色、小役人の答弁のように結んでいる。恥ずかしながら紹介してみよう。

「ここでは牛玉宝印が近江の村々、特にオコナイの中でどのような諸相を示すかについて報告し探ってみた。筆者としては、行事の呼称、行為そのものから判断し、牛玉宝印の系譜を示そうとしたものであるが、報告の中には、牛玉宝印のカテゴリーから逸脱しかねないと思われるものも含まれており、複雑な様相を我々に呈示する。このことは、またオコナイが、個々の村々の土着の民俗信仰や、外来の信仰をふまえて現在に至っていることをよく示している」具体性に欠けるこの結論からは、いかにもデータは豊富だがこれを使いこなせないもどかしさが滲んでいる。

さて今回取り上げたオコナイ行事にみる牛玉宝印の諸相は、明確に次の諸点への足がかりとして提示した。

1、オコナイの根幹をなすものは魔除行為ではなかろうか。
2、それは牛玉宝印・乱声・勧請縄・弓射ちなど魔除行為の積み重ねで成立したのではなかろうか。
3、オコナイ行事の複層性も実は魔除行為の多重性にあるのではなかろうか。年頭の諸行事との線引きもこのバロメーターにあるのかもしれない。

いずれにしてもオコナイ行事は、人々の暮らしそのものと密接不可分の行事であるが故に現在まで存続してきたのである。本稿で紹介した牛玉宝印の村落における種々の受容の形は、単に寺社からの移行文化を遵守するだけで

はない骨太さを示している。いかに牛玉が貴重な妙薬とはいえ、庶民にとっては手の届く存在であるはずがない。それに類似した赤土、もしくは神聖な土でもって牛玉宝印授与と同様の行為をすることは、オコナイの場では広く見られたに違いない。特に伊香郡の余呉町では現在もむらの人たちの手で牛玉宝印の授与が額に、お鏡になされていることが興味深い。甲賀郡では天台系の寺々で種々の呼称で牛玉宝印の授与が法印・別当の介在とともに行なわれている。そしてこの牛玉宝印は、バイとかボウとかよばれる村々に自生する木、それも霊力が宿ると意識される柳、虫のつかない漆の木などに挟まれパワーアップして村独自の呪符として田の水口に立てられるのである。

注

(1) 宇野日出生・中島誠一共著『神々の酒肴—湖国の神饌』(思文閣出版) 一九九九年

(2) 拙稿「オコナイの根幹をなすもの」(史学論集—仏教大学文学部史学科創設三十周年記念) 一九九九年

(3) 拙稿「長浜市宮司町のオコナイについて」(市立長浜城歴史博物館年報第一号) 一九八六年
拙稿「東浅井郡浅井町高山のオコナイについて」(市立長浜城歴史博物館年報第二号) 一九八七年
拙稿「坂田郡山東町河内のオコナイについて」(市立長浜城歴史博物館年報第三号) 一九八九年
拙稿「甲賀郡石部町西寺のオコナイについて」(市立長浜城歴史博物館年報第四号) 一九九一年
拙稿「伊香郡木ノ本町杉野上のオコナイについて」(市立長浜城歴史博物館年報第五号) 一九九四年
拙稿「伊香郡木ノ本町杉野中・向のオコナイについて」(市立長浜城歴史博物館年報第七号) 一九九八年

(4) 『湖北のまつり』(市立長浜城歴史博物館特別展図録) 一九八五年
『近江のオコナイ』(市立長浜城歴史博物館特別展図録) 一九九〇年

(5) 「近江国多羅尾村風俗問状答」には、成花・牛玉宝印・子やや・カンジョウ吊りなど当地でおこなわれているオコナイ行事についての記載がある。

(6) 井上頼寿『近江祭礼風土記』(一九六〇年) を参考

(7) 井上頼寿『近江祭礼風土記』(一九六〇年) を参考

(8) 井上頼寿『近江祭礼風土記』(一九六〇年) を参考

(9) このほか甲賀郡甲南町市原、栗太郡栗東町御園字山入、伊香郡高月町高野などに牛玉宝印および牛玉宝印の授与が見られるが紙面の都合で省いた。ただしこれらについ

ては一覧表に略述した。

(10) 拙稿「近江のオコナイにみる牛玉宝印の諸相」(町田市立博物館図録第七十八集) 一九九一年